「天文測量から衛星航法へ」

堀江商会
小網　均

＜講演概要＞
　明治から始まった近代測量の体系は、経緯度原点で天文観測を行うことから始まった。日本の骨格測量が天文測量によらず三角測量方式を採用したのは、三角点の多くを山頂に設置して、「連接点間の視通線を確保」しながら高精度の位置を求めることができたからであった。その後、衛星航法の出現で「視通線の確保」が不要になり任意地点の位置は、人工衛星の電波を受けることにより高精度でリアルタイムの情報として簡単に求まる ようになった。
　今回の発表は、１９７０年代の海外地図作成プロジェクトで写真測量方式を採用して、低湿地帯に設置した基準点間を「視通線の確保不要」の衛星航法を活用しながら測量した体験報告である。
　また、江戸時代末期に越中富山の新湊で活躍した偉人”石黒信由”が 暦学と測量学を駆使して作成した「加越能三州郡分略絵図」に習い、天文・衛星航法が持つ後方交会法の特性を利用して 「平成の浪漫地図夢・越中加賀百万石姿形図（富山湾・能登半島）」を作成したので紹介した。

☆発表資料